

2022年12月18日（降臨節第4主日、A年）

牧師メッセージ

「聖霊を迎える」

（マタイによる福音書1:18-25）

司祭ヨセフ太田信三

「イエス・キリストの誕生の次第は次のようであった。」と始まる今日の福音。直訳すると「イエス・キリストの起源はこのようであった。」です。ここで「起源」とされた単語は「ゲネシス」というギリシャ語で、マタイによる福音書1:1「系図」にも同じ単語が使われています。今日の福音は、産まれてくる子が誰であり、どこから来るのかを説明する箇所だと言えます。

「ゲネシス」という単語は、旧約聖書のギリシャ語訳では創世記のタイトルとされ、英語でも創世記は「Genesis」です。イエス誕生の物語と神の創造の物語がここに重ね合わせられているように思えてなりません。創世記では、すべての命を神が創造し、すべての命を祝福されます。しかし、残念ながら人は神の許を離れてしまいます。それでも人を救おうとする神と、繰り返し離れる人間の物語は、旧約聖書の終わりまで続きます。しかし、神は主イエスによって、再びすべての命とご自分との関係を回復されるのです。まさにすべての命、世界の再創造が主イエスによって開始されます。神の祝福から離れ、孤独や苦しみに生きる人間を、神が再びご自分の許へと集められる。そのために、まことの羊飼いとしてみなさんがわたしたちのもとに遣わされます。

創世記とイエス誕生の物語を見ると、カインによる弟殺しと、ヘロデによる嬰兒大量虐殺を重ねずにいられません。神による創造の直後にも、イエス誕生の直後にも、人が人を殺す出来事が起こります。このことを思うとき、カインからわたしたちまで、人が変わることなく罪深い存在であることを知らされます。カインは弟への嫉妬で弟を殺します。ヘロデも嫉妬や、自らの地位が脅かされることへの恐怖からです。ここに、どうしようもない人間の姿を認めなければなりません。自らを王とするのが人間です。わたしたち皆がカインとヘロデと同じ人間です。

神から離れることが「罪」だと、聖書は伝えます。その人間の実態はかくも恐ろしいものです。そしてその姿を自分自身のうちに認めるとき、わたしたちは自らに頼るのではなく、神からの助けを求めずにはいられなくなるはずです。その時、わたしたちにもヨセフの信仰への道が開かれます。ヨセフが聖霊を受け入れたことでイエスが誕生したように、わたしたちも神を求め、聖霊をお迎えし、その聖霊によって変えていただくとき、心から自らのこととして主イエスの誕生を祝う者とされるのです。